

---

# はんもん小説

にごり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

はんもん小説

### 【Nコード】

N4346M

### 【作者名】

にごり

### 【あらすじ】

はんもん、スノーの回想

## ピンク・エターナル・クリスタル

「どうかした、スノー？」

ご主人様に呼びかけられて、僕は顔をあげた。

「な、なんでもありません」

ご主人様は心配そうな顔をしていた。

僕の思っていたことが、顔に出てたのかな

「さびしそうだったけど」

「いえ…。少し、昨年のことを思い出していました」

昨年の初冬。それは、僕があの子と出会ってから間もないときだった。

「今日はどこへ行かれるんですか？」

お出かけが好きだった僕は、ご主人様にそう訊いた。

ご主人様はにっと笑って、

「マイピクさんとこにね」

と言った。

今日はいったいどんなマイピクさんの家に行くんだろう

そんなことを思う。

大抵、ご主人様が「マイピクさん」というときは、僕の知らない人のところへ行く。知り合いの人のところなら、名前で呼称するから。

その人のところは結構遠い場所にあった。

「こんにちは」

ご主人様は少し大きな声でそう言った。

少ししてから出てきたのは、女性だった。

「いらつしゃい」

笑顔でご主人様と僕を受け入れてくれた。肩にはこの方のはんも

んらしき方が乗っかっている。

「こんにちは、僕、Snowといいます」

「こんにちは、自分はSpritefulと申します。スノー様ですね、よろしく願いいたします」

丁寧な口調で、さらにお辞儀までしてくれた。

あ、丁寧にありがとうございます。こちらこそよろしく願いいたします

そう言おうと思ったら、スパイトフルさんはお辞儀した姿勢のまま肩から落ちてしまう。スパイトフルさんのご主人様がすぐにキヤツチした。

ご主人様同士がしゃべっている最中、僕はここのはんもんたちと会話をしていた。そしてそんな中で目に留まったのが

「スノーっていうんやな。しろすけって呼んでもええか？」

片眼を包帯で覆った女の子のはんもんだった。

「あ、はい、いいですね…」

最初、どきつとしたけれど、かなりフレンドリーな対応で僕は次第に打ち解けて行った。

彼女の名前はノーノさんというらしい。

彼女との他愛もない話を続けているさなか、唐突にノーノさんは目を見開いて僕に突進してきた。

「うわっ！」

なにするんですかつ！？

そう続けるつもりだったのだけど。

「なんや、これ！？ おもろいなあ！」

僕の翼をしきりに触ってくる。伝わってくる、ノーノさんの手の感触。

どくん

何か聞こえたような気がした。

どくん      どくん

僕の、胸からだった。

どくん どくん どくん

次第に僕の顔が赤面していくのが分かった。  
ぐるぐるぐるぐる目が回る。

僕は何も言えずに、そのまま意識を失った。

「大丈夫、スノー？」

目を開けると、そこには声をかけてくれるご主人様の姿があった。  
「どうかした？」

「……あの場所にいた……ノーノさんという方に、僕の翼を触られて  
……体が熱くなりました」

若干、僕の中で、僕が照れているというのが感覚で分かった。

「そ、そう……だったんだ。恋だね」

「恋……？」

驚きだった。恋という言葉の意味は知っていたけど、僕にそんな  
ときが訪れるなんて。

僕は、ご主人様に仕えるだけで終わる生涯だと思ってた。

僕にも、こんな感情があったなんて。

「ぼ、僕は……本当に、あの子のことが好きなのでしょうか。単に女  
の子でしたから、恥ずかしかっただけなのでは、ないのでしょうか」

「ちがうね。だって、女の子のはんもんだったら、他にも会ってる  
子はいるでしょ。一目ぼれじゃないかな」

「では……一目ぼれで成功した告白はあるのでしょうか」

「……」

僕はいったい何をご主人様に訊いているのだろうか。ご主人様だ  
って流石に驚いた顔をしている。

そう、僕はご主人様に仕えていればそれでいい。余計な煩惱は増  
やさないほうがいいんだ。

けれど、ご主人様の口から出た言葉は、僕の予想とは全く違って  
いた。

「あ、しろすけ！」

笑顔で手を振ってくれるノーノさん。

あれから、僕は自分が出来ることを考えてみた。

僕は、氷の力を持つてる

僕は、その氷の力にノーノさんに対する想いをこめて、永久の雪の結晶を作り出した。

今まで作ったことのある永久の雪の結晶とは違い、それは鮮やかな桃色に染まっていた。

それから、ノーノちゃんへの想いを取り払って作ってみると、いつもの青色の澄んだ永久の雪の結晶ができた。

明らかなる、ノーノさんへの、恋の表れだった。

こんなものが出来上がったときは、心底羞恥したけれど、もう恥ずかしさなんていい。

ご主人様だつて、言ってくれたんだから。

「スノーの人生はスノーのものだから、告白するかしないかは、スノーが決めるといいよ。その結果がどうなったとしても、僕はスノーを怒ったりはしないから」

僕は、ノーノさんの目の前に立った。というより、ノーノさんが既に僕の目の前に立っていたのだけれど。

「ノ、ノーノさん……」

「なんや？」

笑って応えた。僕の鼓動が早くなる。

「こ、これを……」

手が震える。おさえろ。おさえろ。おさえろ。

「受け取っていただけませんか……？」

結局、手が震えるまま、桃色に染まった永久の雪の結晶を渡すことになった。

「これは……？」

「ぼ、僕の力で作った……永久の雪の結晶というものです……。常温で

おいてあれば、絶対に融けることはありません…！」

「そうなんか…冷たいなあ、これ」

ノーノさんは、結晶よりも、僕の手と顔を交互に見ていた。

「なにやってんねん。手震えるぐらいさむなるんやったら、無理せんでもええのに」

そしてノーノさんは、とりあえず体にもらった結晶をつけると、両手で僕の手を抱え込んだ。

どくん どくん どくん どくん

また、鼓動が早くなる。緊張しているんだ。

「で、どないしたん？」

「あ、え…と…その…」

うまく口から言葉が発せられない。

二十秒ぐらい沈黙があつたかと思うと、

「ノ、ノーノ、さん！」

のどにつかえていた言葉を、思い切り吐き出した。

「つ、付き合ってくださいませんか！ ひ、一目ぼれしてしま、しまいました！」

さすがに、いきなりの言葉にノーノさんもきょとんとしていた。

そして、ふっと口角が上がったかと思うと、

「ええで。うち、告白されたの初めてや。しろすけみたいなん、うちも好きやで」

ほとんど一方的で。

断られることを前提として。

自分の想いに嘘をつかずに。

相手に自分の気持ちを伝えた。

そして ここに両想いの恋人ができた。

「そっか…しばらく向こう行ってないから」

こくりとうなずくことしか出来ない、僕。

「それじゃあ…」

ご主人様の言葉に僕は顔を上げる。

「次の日曜日にでも、行こうか」

僕の顔は自然とぱあっと明るくなっていた。

\*

僕は、恋人ができたことによつて、ご主人様に仕える立場のくせに、差し支えになつてしまつてゐるんじゃないかな。

それでも許してくれるご主人様には感謝してる。

でも、僕らはんもんはご主人様に仕えることが第一前提。

それをなおざりにして、恋人と会えないから、としよぼくれるのは、間違つてゐるんじゃないかな？

僕は、これから成長しないといけない。

\*



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4346m/>

---

はんもん小説

2010年10月20日16時35分発行